吹険！～吹奏楽部×ファンタジー！？～

碧。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吹険！～吹奏楽部×ファンタジー！？～

【Ｎコード】
Ｎ５１４８Ｚ

【作者名】
碧。

【あらすじ】
目を覚ますと、そこは異世界だった――世界を救うのが中学生の吹奏楽部でいいんですか！？　とにかく、いざ冒険に出発です。

アウフタクト1（前書き）

Ｆａｎｔａｚｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｐｅｒｃｓｓｉｏｎ！？の元の作品です。

前の作品を読んだ方で嫌だな、と思った人は気をつけてください！

アウフタクト1

どうも、嘉田です。『Ｆａｎｔａｚｙ ｉｎ ｔｈｅ Ｐｅｒｃｓｓｉｏｎ！？』の元ネタ、この『吹険！』では二学年下としてのキャラとなりますがまあよろしくお願いします！

とりあえず主人公メンバーはパーカスメンバー四人ではなくなります。うちが一年としての設定なんでパーカスメンバーは何人か出てきますが、「パーカス」が主人公ではないですね。

まあ、これからもよろしくお願いします！

突然異世界の揉め事へ巻き込まれた者達は。

「地球」では出会う事の無かっただろう者達で。

見つかる事の無かった運命を見つけるだろう。

初めて出会った者同士はその出会いを喜び。

以前から共に居た者には、新たな発見をする。

その「運命」は呪うべき物なのか、祝うべき物なのか――

「成実、皆はどこ？　」

「それが、居ないんだよ」

気が付いたら知らない場所に居ました。

今の現状はその一言に尽きますね。

事の発端は多分、ほんの数分前のこと。

うち達が先生に頼まれて学校の倉庫に物を取りに行ったのが原因、なのだろう。

上手く、思い出せないけれど……数分前の事なのになんでなのかな?

アウフタクト１（後書き）

パーカッションでなく、吹奏楽部全パートが出ます。
設定は少し変わってますので、ご了承お願いします。

アウフタクト2（前書き）

二話目です。そして、超・ぶっ飛び・展開です。

アウフタクト2

＝？？？＝

「長老――！」

一人の少年が街の外れにある家へと駆け込む。

「大変なんだ、女王様が……っ」

「知っておる」

少年――トオイに長老、と呼ばれた老人は水晶球を覗いている。

「全てこれで見ておる。――突然女王は何をいいだすのじゃ……！」

「なんで、急にあんな事を」

この世界の女王、アリーチェ。彼女は最高の女王、だった。

アリーチェに世界の住人が出された条件は、

『自分の気に入る演奏をすること』

それだけならまだ良かった。

『但し、少人数での演奏は不可。二ヶ月以内にそれが叶えられない場合』

『叶えられるまで、一週間ずつ税を上げていく』

それが、幸乃達の世界なら。

簡単な事だっただろう。

しかし、この世界は。幸乃達の世界で言う、「合奏」を知らない。

音楽の世界、とは言えど、「趣味」に近いのだ。

バンド程度の人数のものはあるが、オーケストラといった、多人数の合奏は知らない。

二ヶ月なんて短い間では、楽譜を作るだけで時間が過ぎてしまう。

女王の満足できる演奏は、できない。

「女王が別人になったとしか思えん命令じゃな」

「どうしよう、無理だよ……！」

「わしに考えがある。少し待っとってくれ」

水晶球を持ち、立ち上がる。

「異世界に道を開き、それができる者達をこの世界に連れてくる」

「え？」

「助けを求めるのじゃ。異世界の者達に」

水晶球に手をかざすと、それは薄暗く光った。

「『――我、異世界の者を呼び出す。汝、その声に応えよ』」

瞬間、太陽のように水晶球が輝いたかとおもうと、

衝撃が長老を襲った。

「長老！」

「いたたた……大丈夫じゃ、これで呼ぶ事には成功したはずじゃ」

「でも長老さっきこっちまで振動がきたのに……本当に大丈夫？」

「まあな。この魔法は一年経たんと使えんが……本当に大きい魔力が必要じゃからな」

異世界から異世界の者を呼ぶ、という行為。

それだけ、魔力の消費は多い。

「魔力の回復もできんしな。あとは時間を止める魔法をかけるか」

「長老まだ魔力残ってるの！？」

「まあな。だが……時間を止めてしまえば、もう魔力はほぼ０じゃな」

だが、止めなければ、異世界で不都合が起こってしまう。

長老は、もう少しで閉まりそうな、歪みに向かって、魔法を唱えた。

「これで大丈夫じゃ」

「ねぇ長老、その人達大丈夫かな？」

「すぐに街にやってくるじゃろう。だから迎えに行くぞ」

「分かった！」

二人は家をでて、街の中央の広場へと向かった。

この世界の希望となる存在と出会うために。

アウフタクト3（前書き）

ようやくプロローグ的な何かが終わります。

アウフタクト3

「成実」

「何？　」

「一つ聞きたいんだけど、ここどうなって来たんだっけ？　」

「……覚えてない、の？　」

「うん、なんか。成実はどう？　」

「覚えてるよ。しっかりと」

その返答に、うちは首を傾げた。

「なんで覚えてないんだろ」

「じゃあ、話したら思い出すかもしれないし説明しようか？　」

「お願い」

「とりあえず……僕達が先生に頼まれて体育館裏の倉庫に行ったのは覚えてる？　」

「うん。あっこは学校の七不思議に数えられてるんだよね。あれは怖かった」

薄暗い、体育館裏の倉庫。想像すると背筋が凍る。

先生は七不思議の噂を知らないから……大丈夫みたいだけどね。

「なんだっけ、楽譜を取りにいったんだよね。入ったところまでは覚えてる」

「正解。じゃあそこからかな？　」

倉庫にはいままで使われてきた楽譜も置かれている。

音楽室に置くスペースが無いので、ファイルに閉まって倉庫に整理されているのだ。

代々残されてきていて、捨てるわけにも行かないのである。

うち達は、先生に頼まれて『Ｌｅｔ､ｓ　ｓｗｉｎｇ』の楽譜を取りに行った。

「僕達が扉を開けたら、倉庫の中が歪んでて、次の瞬間僕達はその歪みに吸い込まれちゃった――って所かな？　どう、思い出せた？　」

「うーん……あんまり。ごめん」

「別にいいよー。それより皆を探さないと。とりあえずこの場所に行ってみない？　」

指差された看板。そこには「ａｎｉｍａｔｅ」と書かれていた。

「それがいいかも。多分街だよね」

「じゃあ行こうか」

うちと成実は他愛も無い事を話しながら看板の指し示す方へ向かった。

この世界の一大事に巻き込まれるとも知らずに。

アウフタクト３（後書き）

さて、次はａｎｉｍａｔｅ。いちいち街の名前をアルファベットで打つのがめんどくさくなってきてます。

一般吹奏楽部員なんですけど（前書き）

はい、ようやく本編（？）です。

一般吹奏楽部員なんですけど

「は、ハロー……」

「嘉田さん、この人達英語で喋ってないから」

ただいま、うち&成実、絶賛囲まれ中。

道なりに歩いてきて、「ａｎｉｍａｔｅ」って街についた瞬間これだよ！

「貴様等、何者だ」

しかもその囲んでいる人っていうのが鎧着て槍持ってる兵士さんでさらにピンチ。

「えーとうち等もなにがなんだか分かってなくてですね」

「そうか。捕らえろッ！　」

兵士達の隊長らしき人の一言で、うちと成実はそれぞれ別の兵士に捕まえられる。

「そいつらは怪しい。何をしでかすかわからんからな、引き離しておけ」

「はッ！　」

ずるずると引きずられ、引き離される。

「成実ぃっ！　」

「嘉田、さん！　」

叫び、もがいて暴れるが、大人の力に適うはずも無く。

しばらくすると、成実は見えなくなってしまった。

「（いきなり処刑とかは無いよねぇ……皆も探さなきゃ、なのに）」

そんな事を考えながらも引っ張られ、何も分からない所へ連れてかれる。

「待たんか！　」

突然、そんな声が聞こえた。

広場のようなそこには、大勢の街の人の前に、老人と少年が立っていた。

「その者はわしの知り合いじゃ。離せ」

「は！？　し、しかし」

「離せと言っている。そんなに我が魔法を喰らいたいか？　」

「わ、分かりました」

「え？　うわっ」

突然離され、バランスを崩す。

「大丈夫かの？　」

「お蔭様で…だけどなんで助けてくれたんです？うち貴方の事知りませんけど」

「それはじゃな、わしがこの世界に君達を呼んだからじゃ」

「は？　」

「この世界を助けてほしいのじゃ」

「え、　」

「詳しい話はわしの家でしよう。トオイ、行くぞ」

「え、ちょっと待って！　成実がまだ捕まってる！　」

「もう一人捕まっておるのか！　こうしてはおれんな。トオイ、行くぞ！　」

「はい！　」

三人でまずはさっきの所まで戻る。

「確か、こっちの方行ってたような……」

しばらく走る。トオイ、と呼ばれた少年は居るが、長老は居ない。

しかし、気を配っている暇は無い。

「居ましたっ！」

少年の声。指が指示している方を見ると、確かに成実がいた。

「（成実――！）」

声は出ない。助けようと、飛び出そうとする。

「あ、待ってください！」

瞬間。

「か、はっ」

兵士の拳が、成実に思い切り当たった。

「なる、み……っ」

「待ってください！　このままでは貴方もまた捕まる。長老が来るまで待たないと……、」

うちの意識が、だんだんと暗くなっていく。

「待ってる暇あるかよ、俺が行ってあいつらぶん殴ってくる」

「!?」

少年の顔が驚き一色になる。そして、うちの意識は完全に消えた。

奪還と説明（前書き）

幸乃の二重人格幸斗登場。
唯の吹奏楽部の子が二重人格って……
変ですよねー。

奪還と説明

「ったく幸乃にまかせたら危ねぇからな。」

幸乃を無理矢理押さえ込み、前に出る事が成功した。

「なあ、お前棒とか無いのか？　」

隣に居た年下だろう男に話しかける。

「持ってない……」

「そうか。すまん。——じゃあ逃げるしかないな。広場まで逃げてろ」

「へ？　」

ぐ、と足に力を入れ、走る。

「俺」で居れば幸乃以上の力を出す事ができる。

成実ごとにはなってしまうが、蹴りを兵士に叩き込む。

兵士は油断していたのだろう、簡単に倒れてしまった。

「おい成実、逃げるぞ！　」

「え？　もしかして幸斗なの？　」

「まあいいからとにかく来い。逃げるからな」

とにかく走った。広場まで逃げた後、さっきの二人と合流した。

入り組んだ道を案内され、街の外れの長老の家だという場所まで来た。

「……あーそろそろ幸乃に戻るから成実、幸乃頼んだ」

「分かった」

「今回俺出てきたのある意味お前の所為だからなー気をつけてくれー」

「うん。頑張るよ。ごめんね」

幸乃の意識は戻っている。

俺は幸乃の奥に引っ込んだ。

「っと、」

意識が戻って少しして、幸斗が奥に戻った。

とりあえず、ここはどこ？

成実が居るって事は、とりあえず幸斗が何かしたんだと思うけど。

「幸乃だよねー？」

「ん。幸乃だよ」

「とりあえず説明をしてくれるみたいだから。ここは長老さんの家らしいよ」

「あー……そういうことね」

「とりあえず見つかったらなんじゃ、入ってくれんか」

「「はーい」」

二人で返事をして、家の中へと入る。

「そこに掛けてくれ」

指差された場所に座り、一息ついた。

「さっきうち等を呼んだって言ってましたけど、どういうことですか？」

「この世界の一大事だからじゃ」

それから説明された事は、信じられない事の連続だった。

「待ってください！なんでそんな女王がいきなりそんな事を！？」

一番怪しい、と言うか疑問に思った事を問う。

成実も隣で頷いている。

「分からんのじゃ。本当に突然でなぁ……」

「っていうかどうしてうち達なんですか。もっと上手い人は他にいるのに」

「同じ楽譜を覚えているかもっているはずじゃ」

同じ楽譜？なんだろう。

「他にも何人か呼んでいるから、その人達もきっと覚えているじゃろう」

「その楽譜って……なんなんですか？」

成実が問う。

「わしにも分からん。楽譜自体もあまり分からんしな」

「そう、ですか……」

「とにかく、皆を見つけないといけんな」

「他の人たちはどこにいるんですか？」

「この世界に散り散りになってるようじゃ。探しに行ったほうがいい」

「でもまたあの王国軍に会ったら……」

「王国軍には話をつけておく。それと、武器を渡すぞ」

え、武器って……誰かと戦うの？

王国軍とは話をつけてくれるんだったら、誰と？

「ここはモンスターがでるからな」

……え？

そ、そんな危険な事に巻き込まないでーっ！！

奪還と説明（後書き）

なんというか……逆でしょう、逆……

男子が幸斗状態とは言え女子に助けられちゃいましたよ。

書いてるの私ですけどね↑え

さあ、出発？（前書き）

設定が酷いのはできればスルーをしてください……！
あ、でも我慢できないほど酷かったら文句を言ってやってください。

さあ、出発?

「っていうか、うち等楽器持ってないんですけど」

「安心せい。楽器はちゃんとある」

長老は立ち上がり、奥の扉の前に立つ。

中には、多くの楽器があった。

「うっわ……」

「すごいねぇ……」

どこから集めてきたのだと言うほどにある大量の楽器に、二人して絶句する。

「この世界の楽器は特殊でな」

小さな音をたて、トランペットを掴む。

「これは……なんじゃったかの？　」

そんな言葉が呟かれると同時に、トランペットは小さなナイフになった。

「「!？　」」

「こんなふうに、武器に変化するのじゃ。何故かはわかっとらんが

の」
「武器として使っても楽器としては傷つかないから安心なんだよー」
えっと、つまり自分の楽器をここから選んで旅に出ろと。そういうことですか。
「分かりました。じゃあ他の人と会ったらまた戻ってきたほうがいいですよね」
「じゃろうな。案内役として、トオイが共に行ってくれる」
「お願いします」
「いやいや、こちらこそお願いね」
「とにかく、まず楽器を選ぶのじゃ」
大量の楽器を見る。うちパーカスなんだけど、スネアとか持っていくの？
あ、もしかしてスティックとかが変化するのかな。
すきな楽器は鍵盤。だから、良さそうなマレットを手に取った。
武器になれ、と念じると、一組のマレットは、槍に変わった。
「おお……でも楽器で戦う事に抵抗感が」
「あのね、楽器は武器に変化してるんじゃなくて、どこかに武器が

ある空間があってそこに楽器を移動させて変わりに武器をっていう考え方もあるから大丈夫だよ」

「うーん……そういうもんかな」

苦笑いをして、軽く槍を振る。マレットも丁度いいし、槍はうち的に使ってみたかった武器だ。

そこで成実が気になり、成実のほうを見る。

「うーん……色々あるなあ」

まだ考え中のようですね。成実はトランペットの前で腕を組んでいる。

あんまり管楽器のことは知らないから分からないけど……

やっぱり一つ一つどこか違うんだろうね。

「ちょっと吹いてみるね」

ポケットからマウスピースを取りだす。

……ああ。やっぱり自分のマウスピースがいい……って、

「なんでマウスピース持ってんの！？　」

「え？　ポケットに入ってた」

「ソウデスカ……」

約二十分後。成実は楽器を決めたようだ。

「僕の武器はワンドって言うのかな？　魔法が使えるみたいだよ」

彼によれば、トランペットから変化したワンドを持った時、魔法がいくつか頭に流れ込んできたらしい。

「じゃあ準備もできたし、行きますか」

「そうだね。トオイ、道案内頼むね」

「はい！　」

長老の家を出て、歩く。少しすると、街の出口を見つけた。

「気をつけるのじゃぞ」

長老の見送りを受け、うちと成実とトオイ君、三人は当ても無いまま、出発した。

さあ、出発？（後書き）

武器が楽器……自分で書いといてなんですが人をかなり選びますかね？

自分で「武器と楽器は別物だから大丈夫」と言い聞かせてます（笑）

分かれ道なう。（前書き）

新しい街へレッツゴーのターンです。
ちなみに、トオイ君の楽器はサックスです。

分かれ道なう。

「出発したのはいいけど……」

「皆がどこに居るのかまったく分からないね」

ａｎｉｍａｔｅを出発して数分——最初の分かれ道。

トオイによると、どれも街への道らしいが。

皆がどこに居るかさえ分かればなあ。

「ｔｒｉｏに行きましょう」

「そこになんかあるの？」

「ｔｒｉｏには三人の『元帥』と言われる人が居るんです」

右手の指を三本立てる。

「それぞれ『ソプラテス』『アルトア』『テノエラ』と言う方たちで、ソプラテスさんは『情報』、アルトアさんは『戦』、テノエラさんは『音楽』を担当しています」

「ソプラテスさんに最近変わった事が無いか聞いてみるっていうこと？」

「そういうことです」

「佐奈、政音先輩、仙里先輩大丈夫かな」

「大丈夫だと思うな。……皆、強いから」

三人が戦ってる所を想像する。

……ああ、確かに大丈夫そうだ。

「とにかく行ってみるしかないね」

「ｔｒｉｏには何分か歩いたら着くと思います」

とにかく、情報を集めるのには最適の場所。

帰るためにも、皆と会うためにもそこに行くしかないだろう。

トオイ君は、忘れ物があったと、ａｎｉｍａｔｅへ戻っている。

二人だけでしなければならない話があれば、今のうちだ。

彼はすぐ戻ってくる、と言っていたし。

「でもさ、成実」

「何？　」

「『ａｎｉｍａｔｅ』『ｔｒｉｏ』これが示すのは？　」

「音楽記号？　」

「正解。じゃあ『ソプラテス』『アルトア』『テノエラ』何を表してそう？　」

「えっと、『ソプラノ』『アルト』『テノール』かな」

「そこで不思議に思った事が一つ。なんで時々出てくる音楽記号、うちらの世界にある奴ばかりなんだろう」

英語、イタリア語、フランス語、ドイツ語。交じり合っているとはいえ、似たような意味だろう。

「さあ……でもたまたまってだけで、同じ意味とは限らないだろうから」

「まずは三人と会う、しかないわけだね」

もし、『ソプラテス』『アルトア』の二人が女性で、『テノエラ』が男性だったら。

『ソプラテス』が声が高かったりしたら。

『ソプラテス』＝『ソプラノ』そういう式が成り立ちはしないだろうか。

「もしかしたら、成実」

「うん。この世界には……」

「思っているより大きな謎が隠されているっぽいね」

「そうだね。なんかレイ〇ン教授みたいだね」

「確かに」

「まあとにかく。皆を探す事が先決にしないと怒られちゃいそうだね」

「あはは……それもそうか」

「佐奈とか意外と怖いからね」

「え、本当？　想像できない……」

「普段怒るのはうちにだけだから」

「ちょっと見てみたいかも。……あ、トオイ」

成実は、少し見え始めてきたトオイに手を振った。

手を振り替えし、すみません、と言っているトオイ君に向かって。

うちも、大きく手を振った。

分かれ道なう。（後書き）

新しいキャラクターが名前だけ登場しました。

さて、どんなキャラクターにしよう……

祝、初バトル（前書き）

初バトルのターンです。
三対三のバトルです。

祝、初バトル

「皆さん、気をつけて！　敵です」

「え、ちょっまじで！？　」

「とりあえず構えてください！　」

その声に、慌てて武器を構える。

最初から武器にしてあるので、その隙は無いはずだ。

「槍、か。使い方は――どっかの国の鬼畜眼鏡の大佐か赤い武将さんと同じでいいのかな」

まあ赤い武将さんは槍を二本使っているが。

そこらへんはおいといて。

「トオイ君、あれはどんなモンスター？　」

「あれはゴブリンです。少し素早いので気を付けて下さい！　」

「分かった！　成実、遠くで援護お願い」

「了解、気を付けてね」

敵は、三体。トオイ君はモンスターとの戦いにある程度慣れてそうだけど。

うち達は初心者。怪我なしは不可能、かな?

痛い思いはしたくない、けど。

ゲームやアニメ、小説で見たキャラクターのように戦える。

それが、少し面白そうでもあって。

「うりゃっ!」

素人なりに、キャラクターの動きを思い出しながら、戦う。

「『炎音の力、球となれ! ファイアーボール』!」

成実の声。燃え盛る炎の球がゴブリンへと向かう。

「幸乃さん、味方の魔法なら、上手くすれば武器に属性を加えられます」

二本のナイフを操りながら、トオイ君が叫ぶ。

属性——か。威力が上がるのかな。

成実が一番使える魔法はさっきの『ファイアーボール』……だろう。

「おっけー。成実、『ファイアーボール』お願いっ!」

「ん! 『炎音の力、球となれ! ファイアーボール』」

炎の球が近くに向かってくる。
槍をその球に思いっきりぶつけるように振る。
炎は槍に巻きついたようになって。
「『炎舞』」
唐突に頭に浮かんできた言葉を告げて、円を描くように敵を攻撃する。
炎が消える頃には、成実の補助とでゴブリンを二対倒していた。
「炎舞」を発動し始めてすぐにトオイ君はもう一匹倒していたようだが。
「あっつぅー……」
「大丈夫？」
槍の先だけとはいえ、何分か炎が近くにあったのだ、かなり暑かった。
「まー大丈夫」
「なら良かった。あ、後僕は今攻撃なら『ファイアーボール』と『アクアロール』が使えるからいつでも言って。『アクアロール』の方は水だから熱くないと思う」

「ありがとう。んじゃ次は『アクアロール』頼むわ」

「僕もお願いしますー」

「頑張るねー。トオイ君ナイフだから今は『アクアロール』じゃないと危ないけど」

いろいろあったけど、まあ皆無事で良かった。

油断はできないけど。

「よっし、目指すはｔｒｉｏ！」

「もう少ししたらｔｒｉｏ、見えてくると思いますよ？」

「まあ、こういうのは気分ってことで」

「幸乃らしいね。うん、じゃあ行こう！」

目指すはｔｒｉｏ、皆の情報を集めに出発です！

到着しました（前書き）

次の街到着。

ｔｒｉｏでの最初の出会いとは？

到着しました

「着いたー！　」

あれから数分歩き、ｔｒｉｏに着いた。

モンスターはあれから出てこなかったので助かった。

「とりあえず街の中を歩いて、それからソプラテスさん、だっけ？探しにいこうよ」

「それが良いと思います」

「情報、かー。皆の話があると良いんだけどね」

街の入り口でそんな事を話しながら、歩き始める事にした。

ａｎｉｍａｔｅとは違う感じの賑わい。

きょろきょろと辺りを見渡す。

「なんか、都会ってかんじだね」

「ああ、そうかも」

ａｎｉｍａｔｅが少し「田舎」っぽいとしたら、ここｔｒｉｏは「都会」そんな感じなのだ。

成る程、その違いを感じていたわけだね、自分。

「ここは色々買えますから。他の街から人がよく来るんです」
並ぶ店や家を眺め、話しながら歩く。
「あれ、あそこ人がなんだか集まってない？　」
「あ……本当だ」
成実が指差す方向には、人だかりが出来ていた。
何かあったんだろうか。
「行ってみますか？　」
「うん、もしかしたら知り合いの誰かかもしれないし」
「そうだね、僕も賛成」
人だかりの中を掻き分け、中心の人を見に行く。
「落ち着いてくださいましー」
そこに居たのは、可愛いドレスを着た女性だった。
しかし、半泣きなのだが。
「え？　何事……」
「あら？　知らない声……」

女性と、ばっちりと目が合った。

「どんな感じ、嘉田さん」

少し遅れて、人ごみの中から来た成実に声をかけられる。

「貴方、嘉田幸乃と言いますか？　」

「え、は、はい……」

突然の問い。でもこの人、こっちの世界の人みたいなのに。

なんでうちの名前を知ってるんだろう。

「その……、傍に居るのは安永成実と言いますか？　」

「え？　呼んだ？　」

二人してぽかん、とした顔をする。

「私はソプラテスといいますー。あのですね、私の未来予知に貴方達が女王様の問題を解決すると出たんですー。だから話を聞かせてほしいですー」

「あ、貴方がソプラテスさんなんですか！？　」

予想外の展開。

ソプラテスさんに、こんなに早く出会えるとは。

思わず叫んでしまった。

「私の事知ってるんですかー？」

首を傾げるソプラテスさん。

「教えてもらったんです」

「そうなんですかー。とりあえずここから逃げましょう」

「っていうかこれどんな状況なんです？」

「貴方達が今日来ると聞いたので久しぶりに神殿から出たら囲まれましたー」

ああ、神聖な存在が外に出たから囲まれたわけですね……

「えーと、じゃあ少し皆さんに恨まれちゃいそうなんですけど、逃げますか……成実、トオイ君、準備しといてねー」

「おっけー」

「分かりました」

「どっちに行けばいいんですか？」

「あっちに言ってくださいましー」

指差された方を見る。神殿だろう建物が遠くに見えている。

ああ、神殿に逃げて、ゆっくり話をってことですね、分かります。

「じゃあ、行きます。手を握っていてくださいね」

「分かりましたー」

ソプラテスさんが立ち上がる。

瞬間、ソプラテスさんの手を握ったまま走り出す。

街の人たちはショックを受けているようだが……ごめんなさい。

とにかく、あんな状況じゃ何も話せない。

全ては神殿に行ってからだ――！

到着しました（後書き）

ソプラテスさん、可愛い感じの子で。

「〜まし」って時々つくのは、私が某電車の車掌さんの▲さん好きだからです。

はじめまして、お兄様？（前書き）

誰が誰の「お兄様」なのかは呼んでもらえれば分かります（笑）

はじめまして、お兄様？

「――はぁっ、」

神殿に、着いた。全力で走っていた所為でかなり息切れしている。

もともと吹奏楽部なのであまり体力は無いのだ。

「はー……疲れた」

成実なんかは男子だからうちよりは少しましみたいで、もう落ち着いてきている。

「あの、さぁ……なんで……二人はそんなに元気なんだ……特にトオイ君はともかくとしてソプラテスさん！　」

「なんでと言われましてもー。大丈夫だから大丈夫なのですー」

「僕は結構戦ってますから。多分体力あるんですよ」

トオイ君とソプラテスさんは……今まで全力で走っていた事が嘘のように息切れなんてしていない。

何故だ。ソプラテスさんとか結構か弱いイメージなのに。

まあ気にしてもしょうがないか。

「とにかく神殿に入りましょうー」

「分かりました」

大きな扉を開ける。かなり長いだろう廊下の先は見えない。

部屋の扉はいくつかある。

「こちらでございましー」

ソプラテスさんに案内されるまま、廊下を進む。

案内された部屋は、廊下の先。一番奥の部屋。

ゆっくりと扉が開かれ――……あれ、誰が開けたの……

「ソプラテスっ！！」

中から飛び出してくる人影。それは、一直線にソプラテスさんへ向かい――

「兄様、邪魔でございまし」

ソプラテスさんに抱きついて半泣きである。

「だ、誰……」

「ソプラテスさん、この方は……？」

「私の兄様、テノエラ兄様でございましー」

「「「テノエラ兄様ぁ！？」」」

疑問をただ呟いたうちに比べ、成実はソプラテスさんにきちんと質問してくれた。

しかし、彼女の口から飛び出したのは、驚きの事実だった。

いや、まじで。……あれ、トオイ君も驚いてる。

「トオイ君……知らないの？」

「ええ……元帥は兄弟、とは聞いてません」

「公表してないからな、当然だろ」

テノエラ兄様、と呼ばれていた男性が、ソプラテスさんから離れて言った。

「兄様、トオイさまと幸乃さまと成実さまでございましー」

「ああ、前見たっていってた奴等か」

テノエラさんは成実を睨みつけて……

「おまえ、成実……ソプラテスに手ぇだして無いだろうな！」

「なっ……！？」

突然、そんな事を言い出した。

成実、驚きで声もでないみたい。頑張れー。

「兄様、ふざけないでくださいまし」

あれ、ソプラテスさん……なんか怖いんですけど。

「あ……いや、大丈夫ならいいんだ大丈夫なら……すまん」

「謝るのは私ではなく成実さまの方にでございまし」

「……悪かった、すまん」

「いえ、別に……」

成実も少し困っている。

まあ何にせよ、ソプラテスさん最強、ということか。

「アルトア姉様も呼んだら話を聞かせてもらいますー」

「分かりました」

ソプラテスさんはそう言うと、ドアを開け、出て行った。

意外と……個性的な元帥さんですね。

はじめまして、お兄様？（後書き）

あれ、テノエラがただのシスコンに……
もっとクールなイメージだったはずなのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5148z/

吹険！～吹奏楽部×ファンタジー！？～

2012年1月8日18時49分発行